

広報

かみす

Kamisu public relations



2025年

1/1・15

No.428

特集

南極観測隊

地域医療から極地へ

神栖ディスカバリー

File
19

南極の昭和基地上空に現れたオーロラ。かつて神栖済生会病院に勤務していた医師が、現在、南極で活動しています。南極の医師から届いたメッセージを紹介します。

Pick up

市長・議長から新年のごあいさつ…………… P2～3
息栖神社周辺地域振興拠点施設の愛称が決定しました！… P8
4月からの会計年度任用職員募集 …………… P10～11



市メールマガジンはコチラ



広報かみすが動き出す
【COCOAR】アプリをダウンロードし表紙にスマートフォンをかざしてください。詳しくは14ページ



【COCOAR】





特集

南極観測隊

地域医療から極地へ



がある。夏期間には夏隊・越冬隊合せて約100人が活動している

長い人では約1年3カ月にわたって南極に滞在し、さまざまな観測や研究をする南極観測隊。神栖済生会病院に勤務していた医師が、医療隊員として活動中です。仕事や暮らし、神栖市の子どもたちへ伝えたいことなど、南極から届いたメッセージを紹介します。

とある医師の特別なお正月

毎年、心新たに迎えるお正月。国や地域によって風習は違っても、「今年が良い年になりますように」という願いは同じです。ところで皆さんは、お正月をどこで過ごしていますか？ 実は神栖市の救急医療を担っていた医師が、日本から遠く離れた南極で今年のお正月を迎えています。それは、神栖済生会病院に勤務していた小田有哉（ゆうや）さんです。

小田さんは、なめがた地域医療セ

約14,000km先の海の向こうに南極がある



神栖済生会病院（左）と同病院で勤務していた当時の小田医師（右）

ンターに勤務していたときに神栖市の医師不足を知り、2021年に神栖済生会病院に着任。救急医療の分野で地域のために役立ちたいという強い思いを持って、交通外傷や労働災害によるけがなどをした患者さんの治療にあたってきました。できるだけ断らずに救急搬送を受け入れるよう力を尽くした結果、救急車の平均搬送時間が短縮したり、病院の応需率が上がったりますなど、地域医療に貢献しました。さらに、地域とのつながりを大切にしており、市内



①



④



②



③

①見渡す限りの大雪原とペンギン ②③南極観測船「しらせ」。厚さ1.5mの氷を連続砕氷できる世界屈指の砕氷船 ④南極観測隊として活動中の小田さん



日本の南極観測の中心「昭和基地」。管理棟、観測棟、居住棟など約60棟の施設

中学校での救命処置講習の実施などにも取り組んできました。

小田さんは、神栖で勤務していたときの思い出を次のように述べています。「決して人手は多くありませんでしたが、重症患者が救急外来にいるときに、どこからともなく病院の仲間が集まってきて助けてくれるのがうれしかったですね。みんなが地域のために」と同じベクトルで働けたことは大変貴重な経験でした」

なぜ南極を目指したのか？

地域に寄り添い、私たちの命と健康を守るために活躍していた小田さんが、今は約1万4000キロも離れた南極にいます。南極は、地球の南の果てにある氷の大陸。地球儀でいうと、ちょうど底にあたる部分です。世界各国が観測拠点を置いており、日本は1957年（昭和32年）に昭和基地を開設しました。世界の気象観測網の拠点にもなっている重要な施設です。

さて、小田さんはなぜ

ドームふじ観測拠点Ⅱ周辺の年平均気温は-50℃以下

あすか基地
昭和基地
みずほ基地
ドームふじ観測拠点Ⅱ

南極大陸

南極点

南極大陸の大きさは日本の約37倍

日本の観測隊が採集した隕石は約16,800個。世界屈指の隕石コレクションの一つ

南極の氷は最も厚いところで約4,900m! 富士山の高さを越える

南極を目指したのでしょう？ そもそも南極に興味を持ったのは、小学生の時に図鑑で南極の特集ページを見たのがきっかけでした。その後、大学の進路を決めるときに医学部か理学部か最後まで悩んだというほど、南極への強い思いを持ち続けていたようです。最終的に選んだのは医師の道でしたが、病院勤務をしているときに一つのニュースが小田さんの心を捉え



昭和基地とオーロラ。1957年に南極の東オングル島に昭和基地を開設



移動だけではなく除雪にも活躍する雪上車



冬は船も飛行機も近づけない



観測にかかわる施設だけでなく発電施設などもある

ます。それは、「もし南極の水が融けると、約60メートル海面が上昇する」という内容でした。改めて子どもたちの興味を持った南極にチャレンジしたいと思い、南極地域観測隊の医療隊員に応募。2度目の応募で採用が決まりました。

出発前は、昭和基地には歯科医がないため、歯科研修を受けて抜歯やかぶせものの再接着法を学んだり、同じく専門外である眼科検査機器の取り扱い方法を学んだりしたそうです。また、重機も取り扱えるよう、運転技能講習も受けました。さまざまな準備を整え、いよいよ出発です。

南極から届いたメール

南極での仕事や暮らしは一体どういうものなのか、想像もつきません。いろいろ質問したいとお願いしたところ、何と小田さんが南極から電子メールで返事を送ってくれました。地球の反対側から届いたばかりの南極での生活を、皆さんにご紹介します。

Q 昭和基地でどのような仕事をしていますか？

小田 医療隊員としては、隊員のけがの処置をしたり、歯の詰めものが

取れたときに再接着をしたりしています。もし、昭和基地の中で対応しきれないような大きな病気になっても、冬の期間は船も飛行機も近づけず搬送できません。また、夏の期間に医療機関へ搬送できたとしても、1週間以上かかります。そのため、何より大切なのが病気の予防。3カ月に1度健康診断を行ない、その結果をもとに健康指導をすることで、隊員が大きな病気にならないよう予防しています。

ただ、医療隊員としての仕事以上に、昭和基地を維持管理する仕事が多くを占めています。主にブリザード(猛烈な吹雪)後の除雪や、生活飲料水を確保するため水槽に雪を入れる作業、冰山やクラック(裂け目)を避けて海水でつながった南極大陸に行くルートを作る支援などです。また、この記事を読んでいるところ(2025年1月)には、おそらく私は昭和基地から約1000キロ離れたドームふじ観測拠点Ⅱ(標高約3810メートル)にいるでしょう。約3カ月間、ドーム隊メンバーの健康管理をします。



Q 南極の生活で苦労したことは何ですか？

小田 苦労したのは、極寒・強風・ブリザードです。氷点下35度まで冷え込んだ日は、息をするたびに身体の中から冷え込んでいきます。指先や鼻や頬がじんじんと痛くなり、作業を中断して温かい屋内に逃げ込まなければならず、作業が思うように進みません。また、急に風が強くなると、少し前まで2キロ先の島が見えていたのに、30分もしないうちに吹雪いて100メートル先も見えなくなってしまう恐怖を感じます。ブリザードの後は高さ5メートル近くのドリフト(雪の吹き溜まり)ができ、建物などの隙間という隙間に雪が詰まって除雪するのが大変です。

Q 南極の生活で、感動したことや楽しみなことは何ですか？

小田 緑・ピンク・赤・紫の色とりどりのオーロラが、うねうねと動いているのを見たときは感動しました。オーロラが出ていないときも、満天の星空は吸い込まれるような美しさです。また、昭和基地の近くでペンギンやアザラシを見ることができですが、極寒のなか出産直後のアザラシの親子が寄り添っている姿に、動物が生き抜いていく力強さを感じました。

Q 休みの日はありますか。何をしますか？

小田 休みは冬期間は週2日、夏期間は週1日あります。先日は氷山で流しそうめんをしました。晴れてい

る日は、島内散策をしたり、隣の島に遠足に行ったりします。天気の良い日はDVDを観たり、基地内のジムで身体を動かしたりしています。

は予防が一番大切です。定期健康診断を受けましょう」

そして、神栖市の子どもたちに伝えたいことも聞いています。

小田 2024年1月1日は、南極観測船「しらせ」に戻って過ごしました。正月の時期の南極は太陽が沈まない白夜なので、夜中も明るいのです。しらせ船内で、海上自衛隊員が作ってくれた除夜の鐘をついたり、おみくじをひいたり、おせちをいただいたりしてお正月気分を味わいました。

「昭和基地での共同生活で大切だと思ったのは、いろいろなことに興味を持つことと人への思いやりです。皆さんもどんどん興味を広げて、楽しんでください。そして興味を持ったことに対して、調べて知識・技術を深めていってください。また、家族と友人を大切にし、周囲の人をよく見て、人の気持ちを考えて行動することが自分自身の成長につながると思います」

神栖市の皆さんと子どもたちへ
小田さんは、今年の2月下旬に帰国予定です。帰国したら一番楽しみにしているのは、もちろん家族との再会。3人のお子さんの成長を、しっかり感じ取りたいと思っています。

一冊の図鑑との出会いから始まった、小田さんと南極の素敵な物語。今年皆さんにはどんな出会いが待っているのでしょうか。お正月に、新しいチャレンジの計画を立ててみませんか？

仕事については、再び地域医療に従事することとなります。「地域を広い視野で見ながら、仲間と共に、自らの足で地域のために動いていきたい」と意欲的です。

最後に神栖市の皆さんへのメッセージをいただきました。

「南極でも神栖でも、病気・けが



①



②



③

①アザラシの親子 ②南極観測船「しらせ」で除夜の鐘をつく小田さん ③白夜では太陽が地平線に沈まない(写真は1時間ごとに撮影した太陽)



昭和基地の仲間と小田さん(前列左から2番目)